

北サッカラ遺跡出土の単純埋葬遺体の 形質人類学的調査

坂上和弘*¹・馬場悠男*²

Anthropological Study of the Human Skeletal Remains from North Saqqara

Kazuhiro Sakaue*¹ and Hisao Baba*²

Abstract

Human skeletal and mummified remains from 49 surface burials in front of Roman catacomb tomb at the North Saqqara conducted by Kanazawa University and the Institute of Egyptology, Waseda University from 2016 to 2019. This is an anthropological report of these human remains studied from 14th to 19th of September 2019.

The purpose of this survey is to list up basic information of these remains, with some morphological interpretations. All procedures were carried out without any breakage of the skeletal remains. Photographs were taken to record characteristics of each individual. In total, thirteen individuals were investigated in this season. There are some pieces of linen bandages adhered to bones of all individuals. This fact indicates that the skeletal remains were buried originally as artificial mummies. Interestingly, some parts of the body such as skulls and lower legs were missing in certain individuals (5 out of 13). In addition, in the “NS05-o00802” individual, 13 vertebrae (from the 3rd thoracic to the 3rd lumbar vertebra) were missing and the trunk was shortened in length. It is possible that these individuals were originally mummified artificially and buried somewhere else, then they were moved and buried at the unearthed places.

北サッカラ遺跡では、2016年から2019年の発掘調査によって、49体の単純埋葬遺体が発見されている（河合他 2018, 2020a, 2020b）。これらの遺体について、2019年9月14日から19日まで現地調査を行なった。調査では、遺体の基本的な情報を取得するとともに、若干の形態学的な解釈も行なった。また、それぞれの遺体について写真撮影記録を行なった（図1）。

今回は合計で13個体の遺体を調査した（表1）。すべての遺体において、骨の表面にリネン包帯の付着が認められた。従って、遺体はミイラ化された後に埋葬されたと考えられる。興味深いことに、13個体のうち6個体において頭部や下肢の一部が失われていた。また、NS05-o00802の遺体では、13個の椎骨（第3胸椎から第3腰椎まで）および肋骨の近位端が失われ、胴が縮められた状態で埋葬されていた（図2）。なぜ遺体の一部が失われたのかはまだ検討中であるが、例えば、別の場所に埋葬され、その後、ここに移動された後に再埋葬された可能性などが考えられる。

今回調査した13個体はミイラ化の処置が施されたと推定されるが、埋葬の場所やその後の状況によって、結果的には白骨化しており、本来のミイラの状態が残っていた個体は存在しない。また、鼻腔天井を確認で

* 1 独立行政法人国立科学博物館人類研究部研究主幹

* 2 独立行政法人国立科学博物館名誉研究員

* 1 *Senior Researcher, Department of Anthropology, National Museum of Nature and Science, Tokyo*

* 2 *Researcher Emeritus, National Museum of Nature and Science, Tokyo*

きた5個体では、いずれも鼻腔天井が破損されておらず、「脳出し」が行われていなかった。さらに、手の位置を確認できたのは11個体であるが、いずれも骨盤前に手を配置する姿勢であった。A.C. アウフデルハイデ (Aufderheide) によれば、ミイラ化にあたり鼻腔天井を破損する「脳出し」は中王国時代からローマ期にかけて見られるものとされている。ただ、ヘロドトスも「歴史」で記述しているように、「脳出し」は「最も高価なミイラ調製の方法」であり、「中級」や「下級」のミイラ制作方法では必ずしも「脳出し」が行われていたわけではない。また、古代エジプトミイラにおける手の配置は時代や身分によっても異なり、骨盤の前に手を配置する姿勢は古王国時代から末期王朝時代にかけていずれの時代でも見られるものとされている (Aufderheide 2003)。この姿勢も身分や地域によって異なり、ギリシャ支配期においても骨盤前に手を配置する姿勢は見られている (Elias et al. 2014)。したがって、今回調査した13個体のミイラ化手法から年代を絞り込むことは不可能であるが、今回調査した集団に施されたミイラ化手法は社会階層が上流の人々に使われていたものではない、とは言えよう。本人骨集団の脊椎骨には、関節炎症状や椎骨癒合などの重篤な障害が7個体に認められており、脊椎骨や肋骨の陈旧骨折は4個体に認められた。これらは、この集団が過酷な環境下において生活していた可能性を示唆しており、彼らの社会階層が高いものではない可能性を強く示唆している。

今後の調査によって本遺跡出土遺体の集団的特徴を明らかにする予定である。



図1 復元された頭蓋 (NS05-o00839, o00847, o00848)
Fig.1 Reconstructed skulls of
NS05-o00839, o00847 and o00848



図2 NS05-o00802 の出土状況
Fig.2 Simple burial NS05-o00802

表1 今期調査した13体の遺体のリスト
Table 1 List of 13 individuals investigated in this season

番号	性別	死亡時年齢	推定身長	保存状況	鼻腔天井	手の位置	歯の状態	椎骨の変性	特記事項
o00715	女性	老年		全身骨が残存している	不明	骨盤前	上下顎全歯槽退縮	C3-4 間に関節炎、Th12 圧迫骨折	頭蓋頭頂部に不整形な陥凹あり
o00764	男性	中年	1672mm	下顎骨以外の頭骨がない	不明	骨盤前	咬耗強、生前脱落と齲あり	Th9-10 間に関節炎	右坐骨枝に骨髄炎あり
o00765	不明	幼年		棺に納められ全身骨が残存しているが、解剖学的位置は乱れている	不明	不明	上下中切歯以外未萌出		左側頭骨に乳突峰巣炎あり
o00766	男性	中年	1677mm	膝関節より遠位部分がない	破損なし	骨盤前	咬耗強、生前脱落と齲あり	C1 後縁に炎症、C2 棘突起変形、Th に骨棘	矢状縫合早期癒合症か？
o00802	男性	思春期		上部胸椎～下部腰椎部分が無く、下腿骨近位部より遠位部分もない	不明	骨盤横？	咬耗弱	Th3-L3 までは破片すらない	左右尺骨近位骨幹に骨膜炎
o00826	女性	青年	1511mm	下顎骨以外の頭骨はなく、下腿骨近位部より遠位部分もない	不明	骨盤前	咬耗弱、生前脱落あり	Th9-12 間に関節炎	右上腕骨滑車部に変形があり、Hegemann 病の可能性がある
o00829	男性	中年	1654mm	頭骨はなく、膝関節より遠位部分もない	不明	骨盤前		L3 左肋骨突起に骨増殖、L3-4 関節に左右差、L に骨棘	腰椎に側彎あり
o00830	男性	思春期	1629mm	全身骨が残存している	破損なし	骨盤前	咬耗強、生前脱落と齲あり	L に骨棘	矢状縫合早期癒合症、左右肋骨に陳旧骨折あり
o00847	男性	中年		ほぼ全身骨が残存している	破損なし	骨盤前	咬耗強、生前脱落と齲あり	C2 と C3 が癒合、Th1-4 間に関節炎、Th-L に骨棘	クリプラオルピタリアあり、右恥骨下枝に陳旧骨折あり、左手第3末節骨関節面に象牙質化、右尺骨肘頭に異所性骨化
o00848	男性	中年		ほぼ全身骨が残存している	破損なし	骨盤前	咬耗強、生前脱落と齲あり	Th11 と Th12 が癒合、Th に骨棘	胸椎癒合は陳旧性の圧迫骨折によるものと推定される
o00878	男性	中年		全身骨が残存している	不明	骨盤前	上顎歯槽退縮、下顎咬耗強、生前脱落	C3-4 間、Th9-10 間に関節炎、棘突起湾曲	左大腿骨後面に外傷性骨化性筋炎あり
o00883	男性	老年	1740mm	ほぼ全身骨が残存している	破損なし	骨盤前	上顎歯槽退縮、下顎咬耗強、生前脱落	C2-C3 間に関節炎、Th8-L1 関節に左右差、L に骨棘	下部胸椎に側彎あり、右下顎枝に異所性骨化(腫瘍)あり、舌骨および右肋骨に陳旧骨折あり、左脛骨および腓骨近位に骨膜炎
o00884	男性	思春期		一部を除き手骨がなく、大腿骨中央部より遠位部分もない	不明	骨盤前	齲あり		若年にもかかわらず齲あり

参考文献

Aufderheide, A.C.

2003 *The Scientific Study of Mummies*, Cambridge.

Elias J., Lupton C. and Klales A.

2014 “Assessment of Arm Arrangements of Egyptian Mummies in Light of Recent CT Studies”, *Yearbook of Mummy Studies* vol.2, pp.49–62.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

2018 「第3次北サッカー遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.82–112.

河合 望、吉村作治、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美、サリーマ イクラム

2020a 「第4次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.12–31.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、馬場悠男、坂上和弘、サリーマ イクラム

2020b 「第5次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.32–61.

エジプト学研究 第26号

2020年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.26

Published date: 31 March 2020

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist